

---

IS インフィニット・ストラトス 織斑一夏の憂鬱

柊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 織斑一夏の憂鬱

### 【Nコード】

N6384W

### 【作者名】

柊

### 【あらすじ】

この小説はよくある織斑一夏の性格改変ものです。

この織斑一夏は主人公補正が存在しないただの凡人です。それでも良い方はよろしくお願いします。

## プロローグ（前書き）

最初はテンプレな展開になると思いますがよろしくお願ひします。

## プロローグ

「全員揃ってますねー。それじゃあショートホームルームをはじめますよ」

黒板の前で微笑む世間一般の人々が見れば、おおそ美人と思われ  
る山田先生も俺には悪魔にしか見えない。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………」

クラスには妙な雰囲気に含まれている。ついでに言えばこちらに視線を向けている。全く、人生と言うのはままにならないな。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

副担任の先生がうるたえないください。まあ、俺みたいなイレギ  
ユラーがクラスに居たら、そうなるのは分かるけど。なんせ、全員  
女子の高校に男が入学したのだから当然といえば当然だ。にしても、  
なんで俺みたいな凡人がここに居るのだろう。こういうのはイケメ  
ンな奴の特権だ。実際、後ろから「思ったより格好よくないね」と

か「イケメンじゃないのか、残念」みたいな声が聞こえる。基本はそんな感じではあるが、違った視線の持ち主。俺の幼なじみの篠ノ之箒である。もつとも、視線に気付いてそちらを向いたら、視線を逸らされた。いくらなんでもその反応は酷いだろう。

「織斑一夏くん」

「はい……………」

俺の番か。さて、なんて言おうか。一年は確かクラス対抗戦があるらしいし、いつそのこと評判を上げておこう。所詮、一般人の俺では何も出来ないのだから、期待をさせない方が良さだろう。

「織斑一夏です。取り敢えず、皆様に言っておくことがあります。俺は一応、世界で唯一ISを使える男ですが期待はしないでください。世界初の男性IS搭乗者とはいえ、俺はISに関する知識もISの操縦もあまりありません。だから、俺に過度の期待をかけないでいただきたい。この三年間地道にIS勉強をして行きたいのでよろしく願います」

クラスの雰囲気が大きく変わった。具体的には期待していた答えより遙かに下回る答えを聞いて、残念いや失望しているのだろう。特に箒から来る視線はこちらを射殺さんばかりの怖い視線である。本当にこの人たちは俺に何を期待していたんだ。

「ではこれで」

席に戻るとしますか。

パンツ！といきなり頭を叩かれる。

「痛っ！」

この頭の叩き方をする人はこの世界に一人しかいない。恐る恐る後ろを向けば、俺の良く知っている一人の女性がいた。

「なんで、千冬姉さんがここに……………」

「この学校では織斑先生と言え、馬鹿者！」

いきなり酷くないか。いきなり千冬姉さんがIS学園に居たのだから、びっくりするのもあたり前じゃないか。

「織斑先生。会議は終わられたのですか？」

「ああ、山田君。クラスの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

その優しさの十分の一を俺に向けてくれたら良いんだけどな。

「いえ。副担任ですから、これくらいは……」

山田先生がはにかんだ。さっきまでの弱々しさが嘘のようだ。

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を約一年で使い物にするのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は君達たちを十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

相変わらずな発言ではあるな。なんで俺の周りの女性はこんな感じなんだ。流石にクラスの奴もこれには困惑して……………

「キヤーーーーー！本物の千冬様よ」

「ずっとファンでした！」

「千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです」

なんで、こんな反応がでるのだ。これがカリスマを持つ人間と凡人の差だというのか。

「毎年、これだけの馬鹿者が私の元に来るのだ。それとも何か？私のクラスに馬鹿者を集中させているのか？」

そういう発言がリアルに出来る千冬姉さんがうらやましいよ。

「きゃああああっ！もっと叱って！罵って！」

「それでも時には優しくして！」

「そして付け上がらないように躡をして！」

クラスメイトの人たちが怖い。少なくとも俺がいる前で言われるのはかなり困るのだけだな。

「で？お前は自分のことを過小評価しすぎだ」

「そうですか？正当な判断だと思うのですが」

自分が出るからって、弟の俺にそれを押し付けないで欲しい。全く、天才というのは本当にうらやましい。

「え……………？織斑くんって、千冬さんの弟？」

「そのわりには冴えないよね、織斑くんは」

「本当に千冬様の弟なのかしら」

本人の前でそれを言うのか。反論出来るよちはまるで無いから仕方ないことではあるのだから。

「さあ、ショートホームルームは終わりだ。諸君らにはISの基礎知識を覚えてもらう。その後に実習をする予定だ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事しろ、私の言葉には返事しろ」

本当に暴論だな。まあ、その発言を実行させるだけの力があるから困るのだが。

「では、自己紹介の続きを行う」

なににせよ、三年間地味に生きていくとしますか。

## プロローグ（後書き）

この小説を読んでいたいただきありがとうございます。

この小説の主人公はただの凡人です。

ISに乗れること以外の特徴もなく、また決して強くもありません。  
そんな主人公ですがよろしく願います。

感想や意見もお待ちしています。

これからもこの小説をよろしく願います。

## 第一話（前書き）

最初は主人公にいらつくとおもいますがよろしくお願ひします。

## 第一話

「つ、疲れた」

きつい。IS基礎理論がここまで難しいとは。元々、頭があまり良くないから理解するのに苦労する。最も、一番きついのは勉強ではない。

「……………」

廊下でこちらを見る女子たちである。まあ、確かに男が珍しいのは分かる。俺だって、ある程度の覚悟はしていたが、ここまでの物とは予想外だった。全く持って面倒だ。

「……………ちょっといいか」

「ん？」

誰かが話しかけてきた。面倒だから無視したい所だが、女は偉いが常の今では、ISに乗れるとはいえ男である俺が無視したら、どうなるか分かったもんじゃない。

「一体誰ですか……………って箒？」

「……………」

先程、目を逸らされた揚句、射殺さんばかりの視線を突き付けてきた幼なじみの箒であった。今は先程までの視線を感じられないが、その目は確実にこちらを睨みつけている。

「廊下でいいか？」

廊下で良いのか？箒が話したいことは大体理解しているだけ不安ではあるのだが。

「早くしろ」

「ああ」

箒はすたすと廊下に出してしまう。さて、箒の怒りが爆発するのは時間の問題である。言い訳でも考えておくか。

「一夏」

「なんだ？」

「先程の自己紹介はどういうことだ！男ならもっと自信を持って！」

「篤も無茶を言ってくれろ。あそこで自信を持っていたらどうなるか分かって言っているのか？」

「あんな、篤。あそこで下手に出ないと俺は一部の生徒に恨まれるだろ」

「どうということだ？」

「俺は世界で唯一のIS搭乗者だ。そこで自信を持っていたら、クラスで人気も出るだろう。だけど、それだとクラスの中での実力者例えば、セシリア・オルコット。彼女はイギリスの代表候補生だ。本来なら彼女はクラスの有名人になれたはずだ。しかし、俺というイレギュラーのせいで彼女への人気が薄れてしまった。篤だって嫌だろ？努力して身につけた実力よりも、ただの偶然で力を得た奴の方が人気を得たら」

人間関係の軋轢は出来るだけ作らない方が良い。

「だが、それでも……………」

「まだ理由はある。篤もだろうが、少なからずとも俺に期待しただろう？世界初の男のIS搭乗者で織斑千冬の弟というネームバリュー。普通なら強いと思ってしまわないか？実際は強くなんかない、

「ごくごく普通の一般人である俺を」

最大の理由はそこにある。凡人であるこの俺を強いと思ってしまう。それは俺にとっては困るなんてどころじゃない。自分の力は自分が理解している。俺は天才なんかじゃないから、過度の期待を自身にかけない。それをして後悔するのは自分なんだから。

「それは……………」

「取り敢えず、教室に戻ろう。時間無いぞ」

次の授業は千冬姉さんもいる。千冬姉さんの性格上遅れたりしたらただではすまないだろう。

「分かった……………」

篤は先程の剣幕が嘘のように沈んでしまった。まあ、ここまで言えば、俺に期待などしないだろう。篤には悪いが、これが正しいんだ。

そして俺は教室に向かった。

## 第一話（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。  
取り敢えず、二話目です。

この小説の一夏は色々みなさんの予想を裏切ると思います。それ  
まで楽しみにしてください。

感想や意見もお待ちしています。

これからもこの小説をよろしく願います。

## 第二話（前書き）

少々展開が強引ですが、それについては後書きで

## 第二話

「ちょっとよろしくて?」

「なんですか?」

二時間目の休み時間、教室から逃げようとした瞬間に声をかけられた。

今の声は確か……………セシリア・オルコットだったな。自己紹介の時の感じでは、男を毛嫌いしているようだったと思うのだが、俺に何の用だろう?

「今のお返事はなんですか? わたくしに話しかけられたのですから、もっと喜ぶべきでは無いかしら?」

まともな返事をしてこの反応か。これでもし、まともな返事が出来なかったらどうなっていたことや。この類の奴には出来るだけ逆らわない方が良いだろう。

「お会い出来て光栄です。セシリア・オルコットさん。イギリスの代表候補生である貴方に会えて本当に幸運だと思います」

こんな感じで良いだろうか？セシリア・オルコットの機嫌も良かったみたいだし、そのまま何処かに行ってくれ。お前みたいなエリートを相手するのは一番嫌いなんだ。

「凡夫の割に中々良く分かっているじゃないですかね。まあ、気が向きましたらISのことについて教えてあげますわ」

「それは本当、身にあまる光栄です。その際は是非ご教授を」

キンコンカーンコーン。三時間目開始のチャイムが鳴る。やっ  
とセシリア・オルコットが帰ってくる。

「では、私はこれにて」

セシリア・オルコットが席に戻って行くと、同時に山田先生と千冬  
姉さんが入って来る。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明  
する」

一、二時間目とは違い、千冬姉さんが壇上に居ることを見るに大切な話なのだろう。

「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

そんな大事な事をふと思い出したように言っなよ。俺に関係が無いからどうでもいいけど。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけで無く、生徒会や委員会の会議への出席を一年間行ってもらおう。クラス対抗戦は、入学時点の各クラスの実力を測るものだ。今の時点ではたいした差はないが、競争は向上心を生む。何らかの事情が無い限り、一年間はおかわらないからそのつもりで」

さっさと終わってくれないかな。満場一致でセシリア・オルコットなんだからする意味なんて無いのに。

「私は織斑くんを推薦します」

俺の耳がおかしくなったのか？幻聴が聞こえたのだが。

「私もそれが良いと思います」

「なんで、俺を推薦するんだ！」

自己紹介の事を聞いて、俺を推薦しようとするか？普通。理由が分

からない。

「いやだって、織斑先生の弟なんだから、実は強いと思って」

なんでそんな思考にたどり着くんだ。千冬姉さんの弟だからって強いなんて幻想を抱くな。

「俺はしないぞ。そんなこと！」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれたのだから覚悟しろ」

「いや、それでも………」

「待ってください！納得がいきませんわ！」

よし、セシリア・オルコット。俺は今ほど君に感謝したことは無いよ。さあ、早く、自分が代表になると言ってくれ。

「そのような選出は認められません！大体、このような凡夫がクラス代表なんていい恥さらしですわ。この一年間、そのような屈辱を味わえとでも？」

少しいらつくが我慢しろ。ここで怒ったら全てが水の泡だ。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのが当然。それを、偶然ESに乗れる男だからという理由で極東の猿にされては困りません！わたくしはこのような島国にサーカスをする気はありませんわ！」

散々言ってくれるな。それにしてもなんとというか、セシリア・オルコットの発言には違和感が感じられる。なんだろう？

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！大体、文化的にも後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとって堪え難い苦痛だと言うのに」

成る程。セシリア・オルコットに感じていた違和感の正体がようやく分かった。あれ？なんでセシリア・オルコットは固まっているんだ？

「貴方はここまで言われて、何故反論しないのですの？」

なんでそんな事を聞くんだ？……………ああ、確かイギリスの貴族と言っていたから、愛国心が強いのか。それで俺が日本について色々言われて何も言わないことに違和感でも感じたようだ。

「反論と言つか……疑問はあるな」

「なんですの？」

「いや、日本について色々言っていたけど、元々ISを作ったのは日本人だぞ？」

「あっ……………」

セシリア・オルコットが今度こそ固まる。そしてその顔が真っ赤になる。しまった、地雷を踏んだか。

「決闘ですわ！」

「断らせてもらう」

誰が好き好んで代表候補生と決闘するか。普通に断るよ。原因は俺だけ。

「そんな権利は貴方にありませんわ。安心なさい。ハンデはちゃんと与えますわ」

ハンデがあるなしに関わらず、俺は決闘する気なんとない。

「いやだから俺は……………」

「ハンデなんていらん。一夏は必ず勝つからな」

何故、そこで茶々を入れるんだよ。ハンデ無しというかハンデあっても勝てる訳が無い。

「ふん。その発言後悔させてあげますわ」

「お前こそ後悔するなよ」

本人の意見も聞けよ。望みは千冬姉さんだ。千冬姉さんなら……………

「そうか。なら、勝負は一週間後の月曜。第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意して置くように」

あ、これ詰んだ。そんな思いで頭がいっぱいになりながら授業が始まった。



## 第三話（前書き）

今回の話は次の話への繋ぎのため、余りおもしろくないと思います。

### 第三話

「ようやく授業が終わった」

やはり、慣れない単語がたくさん出るだけ普段より疲れるな。それにしても決闘なんて面倒なことになった。確か、代表候補生は三百時間以上はISに乗っているらしい。経験からして既に段違いだよ、まったく。さて、家に帰って勉強するとするか。

「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい？」

山田先生が一体何のようだ？特に問題も起こしてないはずだが。

「えっとですね。寮の部屋が決まりました」

当たり前前の判断ではあるか。不本意ではあるが、俺は世界にとってもかなり重要な位置に存在している。家にいる間に誘拐なんてことがあつたらシャレにならないだろう。

「分かりました。それと俺の私物に関してはどうなったのですか？」

「私物に関しては私が手配しておいてやった。感謝しろ」

千冬姉さんか。というか、人の部屋を勝手に漁ったのかよ。見られて困るものなんてないけどさ。

「何を持って来たのですか？」

「生活必需品だけだ。着替えと携帯電話があれば構わないだろう」

千冬姉さん、あれを持って来てくれてないのか。剣道を辞めてからは趣味はあれしか無いんだけどな。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。大浴場は今の所使えませんで、部屋のシャワーを使ってください」

「はい。それで部屋はどこなんですか？」

まさか、どこかの主人公では無いのだから相部屋なんてオチはないよな。

「945室だ。個室だから安心しろ」

良かった。相部屋なんて気まずいにもほどがある。

「私たちは会議があるので、これで失礼します」

さて、部屋に行くとするか。

「945室はここか」

部屋を確認してドアに鍵を差し込む。

「結構広いな。元々二人部屋だから当然か」

目の前には大きめのベッド。家で使っているベッドよりも良い代物だ。キッチンもあるから料理も出来るな。

「シャワー浴びたら、勉強するか」

勉強が遅れるわけには行かないしな。こんな時、束さんみたいな頭

だったら楽に出来るのに。

「さっさと終わらせますか」

シャワーを浴びて勉強した後、寝ることにした。

「成る程、IS学園がいかにか金をかけているか良く分かったよ」

高校の食堂で店に出せるレベルの料理が出るとは、流石に予想出来る訳がない。

「織斑君、隣いいかな？」

「別にいいけど」

確かクラスの女子だったよな。自己紹介されても覚えきれないから、自信はあまりないけど。

「織斑くん、朝結構食べるんだね！」

「ああ、朝食べないと持たないからな」

なんでこう、燃費が悪いんだろう。原因は分かっているが。

「いつまで食べている！食事は迅速に効率よく取れ！遅刻したらグ  
ラウンド十周させるぞ」

普通に死ぬるだろ。一周約5キロを十回、マラソン選手でもきつい  
よな。千冬姉さんはそれを本気でするから怖い。

「早く食べるとするか」

俺は急いで朝食を食べ、教室に向かった。

放課後、千冬姉さんに呼び出された。内容はセシリア・オルコット  
との決闘についてだろう。

「織斑、お前のISについてだが学園側から専用機を用意すること  
になった」

「そうですか……………」

これは半分人生にレールが敷かれたもの同然だな。ISから離れら  
れないということか。

「それで専用機は何時来るのですか？」

「来週の月曜だ」

え……………それってまさか。

「初期状態でセシリア・オルコットと決闘するのか」

訓練機でないだけマシかも知れないが、まさか決闘当日とか不利すぎるだろ。

「連絡は終わりだ。後は好きにしろ」

そのまま、千冬姉さんが去っていく。ISの訓練はしておくべきだが誰に頼もう？

「一夏、こんな所で何をしている？」

箒か。箒ならISについても知っているだろうしちょっと良いな。

「なあ、箒」

「なんだ？」

「ISについて教えてくれないか？出来ることはしておきたい」

「そうか。なら、道場に行くぞ」

「なんで？俺はISについて……………」

「いいから、来い」

箒に引っ張られながら、道場に向かった。

### 第三話（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。

次回はついに一夏の本質が垣間見ることが出来ると思います。というか、次の話を早く書くために今回の話のクオリティーは著しく下がっていますがご了承ください。

感想、本当にありがとうございます。返信については日曜日の午前中までに返したいと思います。

感想や意見をお待ちしています。

これからもこの小説をよろしく願います。

## 第四話（前書き）

題名を少し変えてみました。

## 第四話

「一夏、一体どういうことだ」

「どういうことだと言われても………」

むしろ、聞きたいのは俺の方だよ。ISの訓練頼んで、何故剣道しないといけない。

「どうしてここまで弱くなっている!？」

「元からそこまで言うほど強くないけど、受験勉強していたから」

「……中学で何部に所属していた」

「美術部だが」

物をイメージして描くことは俺の特技だからな。

「鍛え直す!いくら何でも弱すぎだ!」

何を言っているんだ? 箒は。俺に剣道をもう一度しろと? ふざけな

いで欲しい。

「俺には才能が無いから剣道なんてするつもりは無いよ」

「ふざけるな！！才能が無いと言い訳して努力するのを諦めるな！努力すれば誰でも強くなれる。実際、私は努力して全国優勝を勝ち得たのだ！」

努力か……それは才能がある人間だけが出来る発言だよ。箒は知らないだよな。昔、箒に負け続けるのが悔しくて、家に帰ってから剣道の練習をしたことがあったっけ。箒の練習量を遥かに越える練習を三ヶ月間行つた。血反吐を吐く思いで、実際血尿すら出ても。そして箒との試合を行い、結果、負けた。完膚無きまでにやられた。一撃、たったの一撃で、だ。それだけならまだ良かった。試合後、箒が「まだまだ努力が足らんぞ、一夏」って言ったんだ。今でもその時感じた怒りを覚えている。しかも、俺が練習していた三ヶ月間、箒は古武術を習っていたらしい。剣道の練習時間を削り、おまけ程度の理由で習っていた。そして俺は気付いた。努力しても天才には勝てない。だから、俺は剣道を辞めた。

「ああ、分かった。剣道の練習をやるよ。負け続けるのは嫌だからな」

「これから毎日、三時間、私が稽古を付けてやる。分かったな」

今更だが、IS訓練はどうなるんだ？

「なあ、箒」

「どうした、一夏」

結局、この一週間何してたんだろう？

「ISの訓練はどうなった？」

「……………」

俺も剣道の稽古の時に言ったよ。ISの訓練をしないのかって。最も箒に無視されたんだけどな。

「仕方ないだろう。ISだって無かったんだから」

「いや、それでも出来ることは有るだろう。剣道だってそこまです達してないし」

「……………」

「本当どうすれば良いんだ」

結局、専用機も来ていないからな。セシリア・オルコットに勝てる気がしない。

「お、織斑くん織斑くん織斑くん！」

三回も呼ぶ必要は無いと思いますけど、山田先生。本当に危なかつしいな。

「山田先生。一体何の用ですか？」

「織斑くんの専用ISが来ました！」

俺の専用機か。これでスペックの差は無くなったな。問題はまだまだ山積みだけど。

「織斑、すぐに準備しろ。アリーナを使用出来る時間は限られている。ぶつつけ本番でものにしろ」

今、何て言った？ぶつつけ本番でものにしろ？いや、無理だろ。専用機には特殊武装があるはずだ。そんなもの練習無しには使えない。それはまだ良い。問題は初期設定で戦えと？せめて一次移行ぐらいはさせろよ。

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えとみせる。一夏」

どう考えてもこの程度じゃ無いよ。代表候補生舐めすぎだろ。

「これが織斑くんのISです」

そこにあっただのは白だった。俺にはあまりにも眩しすぎて直視出来ない。

「これが……………」

「はい！織斑くんの専用IS白式です」

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフイッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。分かったな」

俺はISに触れる。その瞬間、体を何かが駆け抜ける。

「これは……………」

一言で言えば違和感。いや、否定と言うべきか。ISが俺を否定す

る。このISは俺のためのものじゃない。俺みたいな凡人が使うものでなく、天才。そう、千冬姉さんのような人間が使うべきものだ。

「一夏、気分は悪くないか？」

「大丈夫です」

最もISを動かす分には問題ない。なら、大丈夫だ。

「一夏、勝ってこい」

なんで期待出来るだろうね。筈としては男が女に勝つという逆転劇が起こると思っているのだろう。最も、そんなことは有り得ないのだが。

「期待はするなよ」

さて、行くとしますか。

俺はセシリア・オルコットのいる第三アリーナに向かった。

#### 第四話（後書き）

この小説を読んでいたいただきありがとうございます。

今回の話で一夏の過去が少し明かされました。ちなみにこの小説では篤は剣道の才能が高いものとしてます。違和感がある方は申し訳ありません。次回はついにセシリア戦です。期待してお待ちください。

感想や意見をお待ちしています。

これからもこの小説をよろしく願います。

## 第五話（前書き）

今回、二次創作でも中々無い展開になったと思います。

## 第五話

「あら、逃げずに来ましたのね」

相変わらずな態度だな。最も、そんなことはどうでも良い。問題はあいつのIS、ブルー・ティアーズだ。手に持っている銃器、スタールイトmk?を見るに、あいつのISは遠距離型のような。さて、どうしよう?俺のISに付属している武装は近接ブレードのみ。既に展開しているが、相性が絶望的に悪すぎる。

「最後のチャンスをおげますわ」

チャンスねえ……それにしても余裕すぎるだろ。敵が目の前に居るのに銃口を下げるなんて。

「貴方の武装を見るにわたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふのなら、許してあげないこともなくつてよ」

そんなこと言っておきながら、セーフティロックを解除しているのはどういふことなんだ?

「許してください。俺が悪かったです。どうもすみません」

謝ったぞ。これで決闘は無しだ。さあ、部屋に帰るぞ。

「ふざけてますの？貴方。そんなわけないじゃないですか。ではこれで……………」

警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「お別れですわね！」

耳をつんざくような銃声。その瞬間、左肩に鋭い痛みが走る。

「ぐあっ！」

今まで感じたことが無い痛み。普通の人間が受けることがまずないものだ。意識が飛びかけるが、ブラックアウト防御があるので意識は飛ばなかった。

「あら、この程度ですか？」

セシリア・オルコットは更に銃弾を放つ。銃弾は俺の左腕を正確に貫く。なんだよ、いくらなんでも、実力に差がありすぎるだろう。ISが自分が思うように動かない。いや、違う。俺がISの反応に追いついていないだけだ。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

弾丸が雨のように降り注ぐ。一つ一つが適当ではなく、的確に狙っているだけ凌ぐことも難しい。シールドエネルギーが削りに削られる。

「はあ……はあ……」

開始数分で三分の二も削られる。絶望的すぎる。当たり前と言えば当たり前か。ISを知識で理解していても実際に動かす時に知識通りに動かせるという訳ではない。ISを動かすには知識と経験が必要だ。俺にはそれが足りない。俺は何も出来ない。

「貴方、本当に弱いですわね。では、閉幕と参りましょう」

セシリア・オルコットが射撃を行う。俺はそれを………避けることが出来なかった。

「試合終了。勝者、セシリア・オルコット」

普通に負けた。当たり前の結果とはいえ、悔しいといえば悔しいな。観客席はセシリア・オルコットに対する賞賛と俺に対する失望が見られた。本当、何に期待していたんだか。はあ……………戻りたくない。

「まったく、お前はもう少し粘れないのか、馬鹿者」

粘れと言われても、ISは初期設定、武装は近接ブレード、使用経験二回。どこに勝てる要素がある。負け戦確定だろ、これ。これで勝つとか余程の戦闘スキルと幸運がいるよな。

「えっと、ISは今待機状態になっていきますけど、織斑くんが呼び出せばすぐに展開します。ただし、規則があるのでちゃんと読んでおいてください」

なんだよこれ、どんな細かい規則だよ。ここまで嚴重だと使う気が起こらんわ。

「今日は早く帰って休め」

ははっ、笑うしかないや。慰めてもくれないんですか。

「では、失礼します」

俺がピットを出て寮に帰ろうとするそこに箒がいた。

「負け犬」

ぐっ！何の反論も出来ない。負け犬なのは事実だからな。

「お前はもう少し、こう、頑張れなかったのか？あそこまで一方的に負けるなんてどうなんだ？」

そう思うのだったら、ISの訓練をしてくれよ。訓練してたら多少は持ったかもしれないがな。

「まあ、これから努力していきますよ」

今日は寝る。嫌な事は忘れて寝る。うん、それが良い。  
そのまま、俺は寮の部屋に戻った。

「くっ！まさかここまで一方的な負けになるとは予想して無かった」

まずい、このままではまずい。私の計画が台なしだ。どうすれば良い。どうすれば良いのだ！

「ん？これは？」

成る程、これは使えるな。まずは彼女に織斑一夏を訓練させて、これを使えば、私の計画を修正することが出来る。

「さて、早速根回しをするか」

織斑一夏、私のために精一杯頑張ってくれよ。

## 第五話（後書き）

この小説を読んただきありがとうございます。

今回の話で一夏は呆気なくやられてしまいました。これが普通だと思うのですがね。後、最後に出て来たのは一巻の内容において大きく影響する人物になります。彼女とは誰か、想像できるとは思いますが。

まあ、次かその次の話をお待ちください。

感想や意見もお待ちしています。

これからもこの小説をよろしく願います。

## 第六話（前書き）

前の話で言っていた彼女が登場します。

## 第六話

朝のショートホームルーム、ここで昨日の決闘の結果が発表される。

「一年一組の代表はセシリア・オルコットさんです。頑張ってくださいね」

山田先生にそう言われて、自信満々な笑みを浮かべるセシリア・オルコット。何だろ？今のあいつ、なんかゲームで調子に乗って主人公達にやられる敵に見える。

「みなさん、安心してください。わたくしが代表になったからにはクラス対抗戦、必ず優勝しますわ」

クラスのみんなはそんなセシリア・オルコットを苦笑気味に見ている。セシリア・オルコットを見ている中、一部の生徒がチラチラこちらを向いている。確か、俺を推薦した奴らだよな？まったく、そんな申し訳なさそうな目で見るくらいなら、最初から推薦するなよ。

「報告も終わった所で授業を始める」

最もこれで期待なんかしなくなるだろうから、しばらくは平穩に暮らせるな。

そう思っていた時も俺にはありませんでした。俺の平穩は僅か六時間でくずれさった。何があったかというところ………

やっと今日の授業が終わった。毎日、毎日、殆どISのことばかりなのが嫌になってくる。恐らく、今日も剣道の練習か………断れたら良いのだけど約束だから仕方ないか。にしても、妙に騒がしいな。廊下の方を向いて話しているが、何かあるのだろうか？

「……………見なかったことにしよう」

やばい。あの青い髪の方は俺の記憶に間違いが無ければ、おそらく生徒会長だ。しかも、俺が見ているのに気付いて扇子を開ける。そこには『連行』の文字が。俺が何をしたと言っただ。もう、休ませてくださいよ。

「織斑一夏くん、ちょっと来てくれるかしら？」

「はい……………」

憂鬱だ。生徒会長から逃げられる訳が無い。箒の視線が怖いが大人数についていくとしますか。」

回想終了。そんな訳で俺は生徒会室に居る。

「で、何の用ですか？」

「一夏くんは生徒会の副会長をしてもらいます」

は？何て言った。俺が副会長だと？ふざけて……いや、良く考える。俺は世界初の男性IS操縦者だが弱い。そして俺の目の前にいる生徒会長は学園最強。大体の事は理解出来た。

「誰に頼まれたんですか？」

「あれ？バレた？」

それは……まあ、俺がセシリア・オルコットに勝っていたら、ともかく負けているのに副会長をしるという方がおかしいだろう。そうになると、誰かに頼まれたと考えるしかない。

「依頼人は言えないわよ？言ったら私でもまずいもの」

まずいって、本当誰に頼まれたんだ？まあ、誰が頼んだにせよ、俺を客寄せパンダにでも仕立てあげるつもりか。

「要するに、俺を鍛える訳ですか」

「ええ。そういうことよ」

生徒会長に依頼した奴はどうせ、織斑千冬の弟だから才能でもあると思っただろう。生徒会長クラスの人間に鍛えられたら、才能あればあつという間に強くなるだろうけどね。俺ではそうもいかないだろうし。最も生徒会長の頼みは元々断れない上に断ったらただじやすまない。結局、逃げ道が無い訳か。

「じゃあ、よろしく頼みます」

「ええ。こちらこそ」

努力はするさ。今の所、俺にはこれしかないんだから。

## 第六話（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。

生徒会長を出した理由はセシリアが居ない分の穴埋めです。それに一夏が才能が無い分、セシリアでは荷が重いですから。それと生徒会長の口調が良く分からない。まだまだ力不足ですね。努力していきます。

感想や意見もお待ちしています。

これからもこの小説をよろしくお願いします。

## 第七話（前書き）

展開が強引ですがストーリー上、かなり重要なのでご容赦ください。

## 第七話

「一夏くん、訓練の前に一次移行をすませないと」  
「分かりました」

そういえば、昨日の戦闘、すぐに負けたから一次移行がすんでなかったんだ。さつさとすませよう。

「それでは行きます」

それから三十分ほどISを動かし続け、初期化と最適化が終了し、一次移行は無事成功した。これで訓練を始められるな。

「嘘……………!?!」

生徒会長さんが何か驚いている。何か不備があったのか？

「ねえ、一夏くん。白式のスペックを確認して！」

白式のスペック？なんだか良く分からないが確認すれば良いんだな。

何か異常があるのかな……………ってなんだこれ？

「生徒会長、これ数字が色々足りないんですけど」

「機械の故障ではないみたいね。とすると、これは本当に白式のスベックというか」

なんだよ、この異常なまでのスペックの低さは。これだと、打鉄の一撃で負けちまう。戦闘の面に関するもの全てが駄目。本当、何の冗談だよ。

「どうします？」

「訓練は無しとしたい所だけど、生徒会の仕事もあるからそうもいかないし……………一応、ISとして動くから今日はそのISで訓練して、次からは打鉄を借りるようになるわ」

ま、それしかないか。白式は後で整備の人に見てもらえば良い。訓練を始めるか。

「それで何を？」

「まず、手始めに武器の展開から」

基本中の基本だな。俺の武装は片割？武器の形状は折れた剣？まじで使えないよ、これ。まあ、始めますか。

「あら、意外と早いわね」

「物をイメージするのは得意なんですよ」

流石に手の中に剣を召喚するイメージなんてしたことないけどなるとかになったようだ。

「うーん、どうしよう？今日はこれだけで終わりの予定だったんだけど。基本移動も出来ていたし」

まさか、これで今日の訓練終わり？なんか呆気ないな。

「それじゃあ、少し早いけど瞬時加速を教えるわ。IS自体はスペックが低いだけだから何とかなると思うわ」

瞬時加速か。接近戦を軸としたISでは必須とも言えるスキル。がんばって覚えるか。

「原理は覚えてる？」

「はい」

確か、後部スラスタ翼からエネルギーを放出、それを内部に取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する。結構怖いけどこのISだとそこまでの速度は出ないから危険も少ないだろう。

「それじゃあ、始めて」

俺は生徒会長さんの指示を受け、瞬時加速を始める。ん？なんで地面が……………

「がはあっ!」

「一夏くんっ!」

なんで？どこにも間違いは無かったはずなのに。成功していたはずだ。それなのに何故？

「一夏くん、大丈夫?」

「はい。大丈夫です。それよりもう一回やってみても良いですか?」

「無理はしないでね?」

そしてもう一回瞬時加速を行う。今度は遮断シールドにぶつかる。

「また、失敗か」

どうなってるんだ。成功したイメージはあるのに。

「もう一回!」

俺はアリーナの使える時間ギリギリまで練習した。

「今日はありがとうございました」

「うん、一夏くんも今日はゆっくり休んでね」

結局、ISの才能も無いのか。辞めたいや、本当。だけど、あいつとの約束だ。辞められない。こんなことになるんだったら剣道するべきじゃなかった。まさか、ISの訓練まですると思って無かったからな。早く休もう。明日は剣道があるんだ。少しでも体力を回復させないと。

俺は寮に帰り、死ぬように眠った。

## 第七話（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。

まず、一夏のISについてはネタバレなので言えません。ただ、あえていうなら単一仕様の副作用のようなものです。

後、楯無は事情をある程度理解しています。

これはアンケートになるんですが、一夏の言っていたあいつを登場させるかです。

いてもいなくても、ストーリーに大きな影響はありませんが、一部原作キャラ。主にセシリアの出番が著しく減ります。期限は九月二十一日までとさせていただきます。

感想は明日の正午までに返信します。

感想や意見、アンケートもお待ちしています。  
これからもこの小説をよろしく願います。

## 第八話（前書き）

今回の話で第の剣道を断らなかつた理由が明かされます。

## 第八話

「よし！三回連続で成功！」

瞬時加速の訓練を始めてから、まともな瞬時加速が出来るまで結構時間がかったな。それでも実戦で使えるものでは無いと言われると、自分の才能の無さに絶望する。

それにしても、生活会長は良い人だよな。ここまで覚えの悪い俺に對して、嫌な顔一つせずISについて教えてくれる。本当にありがたいよ。

「一夏くん、大分上達してきたね。お姉さんは嬉しいよ」

「ありがとうございます。それにしても生活会長はなんで俺みたいな才能が無い人間の特訓に付き合ってくれるのですか？無理をしているならやめてもらっても構いませんよ？」

俺としてはこれが一番の心配だ。生活会長は嫌な顔一つせずに特訓に付き合ってもらっているが、その特訓している時間は生徒会の仕事が無い時である。それ以外の日は生徒会の仕事があるため、この特訓は生活会長の休みの時間を削ってしまっているわけである。だから、生活会長が無理に特訓を見ているなら、やめてもらった方が生活会長のためだろう。

「一夏くん、流石にそれは本気で怒るわよ？別に私は無理して一夏くんの特訓を見ているわけじゃないわ。それに私は知っているわよ？私の特訓も剣道も無い時、一人、アリーナで特訓しているのを」

「見てたんですか！？」

よりによって一番見られたく無い人に見られていたとは。アリーナには誰もいないと思っていたのに。

「むしろ聞きたいのは私の方よ。口では才能が無いとか言っているけど、それでも一夏くんは諦めてないじゃない？」

実際は諦めているんですがね。まあ、それでも努力はしないといけないが。

「それは俺があいつとした約束を守るためですよ」

「どんな約束をしたの？」

「一度自分がやると決めたことは何があってもやり抜くという約束ですよ」

俺と同じように才能なんて無いのに、それでもまだ諦めること無く努力を続けたあいつ。そんなあいつと交わした約束。最も、その約束のせいで俺は二度としないと思っていた剣道をするはめになった

が。

「でも、その約束は一夏にとってつらいものよね？それなのになん  
で守ろうとするの？」

「それはですね……………あいつが羨ましかったからですよ。才能が  
無いのにそれでも努力出来るあいつが。俺は努力することを諦めた  
から。だから、もう一度くらい努力をするだけです。まあ、そん  
な決意をしてこの様ですけど」

あいつは元気かな。IS学園に入学する少し前に転校して行って京  
都に居るらしいけど。

「そう。ちなみにそのあいつというのは男の子？それとも女の子？」

「女でしたけどそれが何か？」

「もしかしてその娘のことが好きなの？」

生徒会長は何を聞くのだろう？聞かれても問題はないけど。

「別にただの親友ですよ。あいつもそう思っているだろうし」

「本当に？」

「嘘つく必要は無いですから」

本当に何なんだよ。そんなこと別にどうでも良いじゃないか。

「それじゃあ、今日の訓練は終わり。それといつまでも生徒会長なんて他人行儀な呼び方は嫌だから楯無で良いわ」

「へ？それどういっ……」

「それじゃ」

生徒会長……いや楯無さんがアリーナから出て行く。本当何があったんだ？

俺は訳も分からず困惑するしか無かった。

## 第八話（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。  
今回の話で一夏が努力をする理由を明かしました。矛盾点があれば  
言ってください。

それと楯無が一夏の特訓を見ていた話をみたい人は感想の方に書いてください。私としては、早く一夏の単一仕様を出したので一巻内容が終わりしだい書かせていただきます。

感想や意見、アンケートもお待ちしています。

これからもこの小説をよろしく願います。

## 第九話（前書き）

今回はかなりクオリティーが下がっています。それについては後書きで

## 第九話

「織斑くんは転校生の噂聞いた？」

「転校生？このIS学園に？」

IS学園の転入に必要な条件はかなり厳しい。国から推薦から無ければ転入試験を受けることさえ出来ず、仮に国から推薦があっても入学試験以上の難易度の試験を受ける必要があるため、基本的にIS学園への転入は無いと言っても構わない。逆に言えば、IS学園に転入出来る奴はかなりの実力者である。

「うん。詳しいことは分からないけど中国の代表候補生だってことは分かってるよ」

「代表候補生か……どんなやつだろう？」

出来れば、俺に干渉して欲しくないがそれは無理だろうな。普通の女子みたいなら良いけど、セシリア・オルコットみたいだったら駄目だ。俺の胃に穴が空くかもしれない。

「やっぱり織斑くんも気になるの？」

「少しぐらい気になるが……それがどうかしたか？」

「ううん、別に。聞いてみただけ」

理由は無いのかよ。何のために聞いたんだ？ 本当。

「そういえば、そろそろクラス対抗戦だけど勝てると思うか？」

「勝てると思うよ。専用機持ちは一組と四組しかいないから、オルコットさんの実力なら余裕だよ」

言われてみればそうだったな。少し考えたら分かることだよな、これ。

「その情報古いよ」

教室の入り口から声が聞こえてきた。あれ？ なんか、ものすごく聞き覚えがある声なんだが……

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝させないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれているのは俺にとって一年ぶ

りの再会となる幼なじみであった。

「鈴……？お前鈴だよな？」

「ええ、そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。久しぶりね、一夏」

鈴……格好付けているのは良いが、後ろを見た方が良さぞ。

「おい」

千冬姉さんが鈴の後ろに立ち、バシッ！と出席簿打撃が入る。あれは痛そうだ。俺自身も数回喰らっているからあの威力については良く分かる。それにしても、どうやって出席簿あの威力を出せるのだろうか？本当に不思議である。

「もうショートホームルームの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん」

千冬姉さんに対して明らかに怯えているな。気持ちは分からないでもないが。

「織斑先生と呼べ。さっさと帰れ、邪魔だ」

「また後で来るからね、逃げないでよ、一夏」

そのまま二組に向かって猛ダッシュ。相変わらずの運動神経だな。なんせ男の俺が勝てないからな……………何て言うか、かなり情けないな、俺。

「今から出席を取る。全員席に座れ」

それにしても鈴が中国の代表候補生だとは予想外にも程がある。まあ、鈴と会えたことは喜ばしいことだから文句なんてないけど。

## 第九話（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。

今回小説の出来が悪くて本当にすいません。

実は小説のデータを一回消してしまったり、警報が出ているのに何故か学校があり、雨に濡れたりして風邪気味で自分でも何書いているか分からず、出来が悪くなりました。

今日は投稿したらずぐに寝るので感想は明日に返させてもらいます。

感想や意見もお待ちしています。

これからもこの小説をよろしく願います。

## 第十話（前書き）

前回、クオリティーが悪くてすいません。これからはそのような無  
いように気をつけていきたいと思えます。

## 第十話

「箒、今日お前やけに授業に集中出来て無かったけど大丈夫か？」

「別に何でもない！」

「そうか。なら良いけど……………」

絶対何かあるはずだけど、本人が無いと言っているのだから追求はしないでおこつ。

「とりあえず、昼飯食べに行かないか？」

「そうだな。食堂に行くとしよう」

そのまま二人で食堂に向かう。

俺は券売機で和風ハンバーグを買い、箒はきつねうどんを買っていた。

「一夏、一週間に一回和風ハンバーグを食べているが、そこまで好きだったか？」

「実は中三の時にかなりおいしい和風ハンバーグを食べたことがあ

ってな。それから好きになっただ」

「そうなのか」

最も今は食べられないから残念だ。どうがんばってもあの味が出せないんだよな。

「待ってたわよ、一夏！」

鈴、そんなにデカイ声を出すな。周りの奴がこっちを見ているじゃないか。

「鈴、すまないがそこをどいてくれないか。食券が取り出せないんだけど」

「あ、ごめん」

その手には麻婆豆腐を持っている。麻婆豆腐に少々トラウマがある俺はあまり好きでは無い。

「それにしても久しぶりだな。一年ぶりだが、元気だったか？」

「当たり前じゃない。そういうアンタこそ元気にしてた？」

「勿論、元気になっていたよ」

相変わらず心配性だな。健康管理はきちんとしているから、病気になるわけないだろう。

「あー、ゴホンゴホン！」

篤、大袈裟に急ぎ込んで会話を中断するなよ。

「向こうのテーブルが空いているから行こう」

三人だけだから、テーブルにつくのはかなり楽だ。最初の頃は十人くらい付いてきて大変だったが。

「それにしても、お前が代表候補生だとは思っても見なかったな」

「この一年努力したから。アンタこそ、ISが使えるってニュースみてびっくりしたじゃない」

一年で代表候補生とは。そういえば、鈴も他に比べると地味とはいえ天才の類だったな。

「一夏、そろそろどういう関係か説明して欲しいのだが」

そういえば、箒には鈴のこと教えて無かったな。それだったら箒の疑問も理解出来る。今日来たばかりの中国の代表候補生と仲良くしていたら不思議に思うな、普通。

「普通に幼なじみだよ」

「幼なじみ？」

「ああ、箒が引越していったのが小四の終わり、鈴が転校して来たのは小五の頭だよ。それで中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ぶりになる」

箒と鈴はちょうど入れ違いで引越してきたんだよな。

「鈴には話したと思うけど、こっちが箒。小学校からの幼なじみだ」

「そうなんだ。それじゃあ、初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

そう言って挨拶を交わす二人。それにしても二人とも髪型変わってないな。

「一夏って専用機持ってたわね？」

「ああ、持っているけど」

「ISの操縦、見てあげていいけど？」

ISの操縦か。確かに代表候補生に見て貰えることは中々無いけど

……

「いや、いいよ。もう教えてもらってるし」

「誰によー！」

「生徒会長だけど」

鈴の体が固まる。転校してきたばかりとはいえ、生徒会長については知っているんだろう。

「そ、それなら仕方ないわね」

「ああ、すまないな」

「あー、ゴホンゴホンー！」

本日二回目。確かに空気だったけど俺は忘れてないぞ。鈴については知らんが。

「もう時間も無いし、いくぞー夏」

もうこんな時間か。千冬姉さんに叩かれるのは嫌だし、教室に戻るか。

「ああ、そうだな」

その翌日、生徒玄関前廊下に張り出されてある紙があった。表題はクラス対抗戦日程表。

一回戦の相手は二組、鈴であった。

## 第十話（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。

次回はついにクラス対抗戦です。一夏の単一仕様を見せることが出来ると思います。

感想や意見もお待ちしています。

これからもこの小説をよろしく願います。

## 第十一話（前書き）

遅れて申し訳ありません。それと、今回の話、後半がカオスなんので分らないことがあったら感想に書き込んでもらえば、ストーリーに影響が無い程度に解説します。

## 第十一話

試合当日、第二アリーナ第一試合。組み合わせは鈴とセシリア。代表候補生同士の戦いであるためか、アリーナは全席満員。一部、残念がっている女子は恐らく俺が出るのを期待していた連中だろう。

「成る程、代表候補生というだけあって、中々強そうじゃない」

「貴女もわたくしに劣るとはいえ、代表候補生というだけの實力はあるみたいですよ」

「随分と余裕ね。でも勝つのはあたしよ」

『それでは両者、試合を開始してください』

ブザーが鳴り響くと共に、鈴が動きだす。鈴はセシリアに向かって突き進む。それに対して、セシリアはスターライトmkで鈴を牽制する。……………この時点で既に次元が違う気がするのだが、これが代表候補生同士の戦いということか。

「良い射撃ね。でも……………」

鈴がもう一度、セシリアの方に向かう。セシリアも先程のように、牽制の射撃を放つ。鈴は何をしているんだ？その方法じゃセシリアには近づけないのに。

「それじゃ甘い！」

その瞬間、鈴のISの肩アーマがスライドし、中心の球体が光を放つ。セシリアは何か気付いたらしく、その場を離脱する。そして、先程までセシリアが居た場所に目に見えない何かが通り過ぎる。

「あたしの衝撃砲を初見で避けるなんてやるじゃない」

「わたくしも正直危なかつたですわ」

衝撃砲………確か、空間に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃を砲弾にする第三世代型兵器。そんなものを自在に操る鈴も凄いが、見えない砲弾を避けたセシリアも凄い。隣に居る筈も呆然としている。

「今度はわたくしの番ですわ」

その言葉と共に、ビットを展開するセシリア。そして、攻撃をする瞬間、アリーナに衝撃が走った。

「一夏！一体何が起こったんだ!？」

「俺も分からん。取り敢えず、様子を見よう」

アリーナの中央から煙が上がっている。煙の中に居るのは、遮断シールドを貫く力を持ったIS。早く逃げないとまずいぞ。

「鳳さん、オルコットさん、二人とも早く逃げてください。先生たちもすぐにISで制圧に行きます！」

「いえ、先生が来るまでわたくしが食い止めます」

「あたしもよ。ここで逃げたら、被害が大きくなるだろうし」

二人共、何を考えているんだ！？あのISは遮断シールドを破壊する威力を持っているのだから、下手したら死ぬかもしれないのに。

「本人たちがやると言っているのだから、やらせてみてもいいだろう」

「織斑先生、何をのんきなことを言っているのですか!？」

千冬姉さん、それは教育者として最低だろう。二人とも、代表候補生とはいえ、命をかけたことなんて無いんだ。無責任な事を言っただけで何が起きてからだと遅い。

『君は織斑一夏か?』

「!?!」

ISのプライベートチャンネルか。危うく声を出すところだった。

「何者だ?」

『その質問に答えることは出来ない』

質問に答えられないということは、正体がバレると不味い人間。この事件の犯人の可能性もあるな。

「それで何のようだ?」

『君は彼女たちを助けたいかい?』

確定だな。通信相手は犯人だ。それだと、この通信を知らせるのは危険か。

「助けたいけど、俺は戦えないぞ?」

『確かに今の君では戦えない。だから、助言をしに来た』

「助言?」

打鉄の一撃でシールドエネルギーがゼロになるISであれと戦って勝つとか、難易度ルナティックすぎるだろう

「この超低スペックのISで勝つ手段なんてあるのか？」

『今からする助言から答えを推測出来れば、あるいは勝てるかもしれない』

「それで、その助言は？」

かなり怪しいけど、一応聞いておこう。会話の内容は記録してあるから、証拠として使えるだろうし。

『まず、君はそのISに触れて違和感を感じただろう？』

「感じたが、それがどうした？」

『あのISは天才、それも織斑千冬クラスのものでなければ、完璧に扱うことは出来ない』

それは、身を持って体験しているから良くわかる。

『そして、君は織斑千冬クラスの才能どころか、才能の欠片も無い

凡人だ。まともには扱えるはずが無い』

「それは嫌味か？」

『だが、いくらなんでもおかしくないか？』

「何が？」

才能無いから、ISが使えないと自分で言ったじゃないか。

『いくら、君に才能が無いとはいえ、そこまで弱体化するはずが無いだろう。それこそ打鉄の一撃で負けるほどのものには』

「確かに言われてみるとそうだな」

打鉄の一撃で負けるほど弱体化するとか、考えてみれば有り得ない話だ。いくら、天才用に作り上げられたISでも、出鱈目過ぎる。

『流石にこれ以上は言えないが、最後に一つだけ言わせてもらおう』

「早く言え」

『君に才能は無い。だから才能があるものに総合力では勝てないだろう。だが、一つ、ただの一つだけに特化すれば、勝てるかもしれない。それと、戦うのならISを展開して、扉に触れる。そうすれば、十秒だけ扉が開く。伝えるべきことは伝えた。後は自分の力で

やれ。ISは既に君に答えているぞ』

通信が途絶えたか。これだけの助言で答えを導きだすのか。取り敢えず、整理しろ。まず、俺のISは天才用に特化している。次に出鱈目な弱体化が発生している。そして一つの事に特化させる。結論から言えば、全く分からない。

「こんだけのヒントでどうしたら良いんだ」

全体的に意味が分からないが、特化というのが特に理解出来ない。特化とか某カオスヒーローを魔力特化にしたぐらいしか思い付かない。  
ん？魔力特化？

「もしかしたら」

俺のISの出鱈目な弱体化。更に一つのことの特化。この二つのキーワードに、ISは既に答えているという発言。これから想像出来ることは……………

「単一仕様？」

そうか、そういうことか。これならもしかしたら、対等に戦えるか

もしれない。

「織斑先生。ロックの解析まで、後どのくらいかかりますか？」

「三分ほどかかる」

「そうですか」

三分か。なら、大丈夫だろう。

「来い、白式」

白式を展開する。展開してから白式のカラーリングが純白から濁った白に変化していることに気付いた。純白の白より、濁った白の方が俺らしいな。

「行って来る」

そのまま、扉に触れる。

扉が開くが十秒しか無い。早く行かないと。

「一夏！頑張れ！」

アリーナに向かう時、箒の声援が聞こえた。箒もまだ期待しているのか。なら、凡人の意地を見せてやるとするか。

## 第十一話（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。

更新が遅れた理由については、英検と中間テストがあったため、勉強していました。

次回でようやくまとも？な戦闘が出来そうです。  
感想の返信はもう少しお待ち下さい。

感想や意見もお待ちしています。

これからもこの小説をよろしく願います。

## 第十二話（前書き）

今回で一卷の内容はほぼ終了しました。

## 第十二話

勢い込んで来たものの、正直な所、先程から体の震えが止まらない。確かに、戦う力は得られたが、その力は諸刃の剣。最悪、一瞬で負ける可能性すらある。だけど、それでも俺は鈴達を見捨てることは出来ない。俺は主人公なんかじゃない。所詮、ただのモブキャラ、一般人Aだ。それでも、ここで諦めたら、多分一生後悔すると思う。だから、俺は戦う。もう後悔はしたくないから。

「鈴！セシリアと一緒に隠れている！後は俺がやる」

「馬鹿！アンタが勝てるわけじゃないじゃない！」

鈴の言っていることは概ね正しい。幾ら、コンビネーションの訓練をしていないとはいえ、二人とも代表候補生だ。逆に言えば、代表候補生が二人で戦っても勝てないほどの強者。ISに乗ってから、一ヶ月程度の俺が勝てる通りはない。

「大丈夫だ。ちゃんと策も用意してある。何の考えも無しに戦いを挑む程馬鹿じゃない」

「アンタの性格を考えたらそうだけど……………」

「危なくなったら、逃げるから安心しろ」

「分かったわ。その代わりに、危なくなったら直ぐに逃げるのよ」

「ああ」

鈴とセシリアはそのまま物陰に隠れる。それにしても、敵も律儀だな。絶好のチャンスを見過ごすなんて。まあ、良い。敵も鈴が離れた途端に戦闘準備を初めている。さて、俺もやるとするか。

「単一仕様、付け焼刃」

単一仕様を発動すると同時に、敵がビームを放つ。俺は敵のビームを避けようとするが、超低スペックの白式が避けられるはずもなく、見事に直撃した。

「一夏！」

「どうした？俺はそこには居ないぞ？」

「!？」

勿論、嘘だ。折角、主人公みたいに格好つけて、あっさり負けるほど囁ませ犬ではない。

「さっきまで、あそこにいたはずなのに……………まさか、瞬間移動

「!？」

「そんな訳ないだろう。俺が使ったのは瞬時加速だ」

「はあっ!？」

驚くのも無理はないだろう。一回の瞬時加速で端から端に残像が残るレベルで移動したのだから。これこそが俺のISの単一仕様、付け焼刃。その能力は、ほぼ全てのスペックを最弱にする代わりに、特定のスペックを本来の力で発揮出来るというもの。言うなれば、ゲームで速さに全振りをISでやっているだけ。弱点の方が遥かに多いが、俺が敵と戦う唯一の手段である。

「……………」

「だから、そんな攻撃は当たらないんだよ」

敵からの攻撃を瞬時加速で避ける。それにしてもこれだと攻撃出来ないし、もう片方の能力を使わせてもらおうとするか。

「来い、片割」

まず、手に片割を召喚する。そして、そのまま付け焼刃を発動させる。

今、現状で俺が使いたい武器は遠距離型。だけど、俺には銃火器を扱うことは出来ない。なら、比較的使うことの多い剣。その投擲

型が一番使える可能性がある。なら、それを顕現させる。

「武器が変わった？」

先程まで、片割を持っていた手には、三本の剣があった。その剣は柄の部分が異常に短い、剣として扱うには不適當な剣である。だが、投げる目的で使うのであれば、都合の良いものである。

そして、これが付け焼刃の能力の一つの武器創造だ。かなりチートのように見えるが、勿論弱点も存在する。まず、作り上げられた武器の性能は上げているスペックに左右される。今回の場合だと、投擲の速さはかなりのものでも、武器の強度や威力などはゼロに等しくなる。壊れた武器は作り直せるとはいえ、隙も出来る上に威力も低いと、かなり微妙な仕様になる。まあ、無いよりはましではある。

「これでも喰らえ！」

「……………」

敵に向かって剣を投げつける。速さはかなりのものなので、避けることも出来ずにヒットする。だけど、全く手応えがない。シールドエネルギーは減ったのだろうか？敵の反応が無くて怖い、塵も積もれば山となる、だ。攻撃を当て続けたら、行けるだろう。

「はあ……………はあ……………」

そんなことは無かった。幾ら、瞬時加速で避けることが出来ても、体に負担は掛かる。筋肉は既にボロボロ。意識も混濁してきた。次の攻撃を避けるのは無理かもしれない。

「……………」

敵がこちらに右腕を向ける。右腕からはかなりのエネルギーが発生していることが分かる。格好つけて、この様とは情けない。

「一夏！何、やってんのよ！アンタ、そいつに勝つんでしょ！だから、諦めるな！」

鈴が俺に向かって大声で声援を送る。しかし、それで敵に居場所を気付かれ、俺に向けられていた右腕が鈴の方に向く。まずい！あのままだと、鈴がやられてしまう。

「うおおおおお！！！」

最後の気力を振り絞り、鈴の前まで、瞬時加速を行う。もう、瞬時加速をする気力は残っていない。結局、守れないのか。俺はここで負けなのか。……………嫌だ。俺はまだ死にたくないし、鈴を殺させるわけにもいかない。負けるのは構わない。だけど、死ぬわけにはいかない！

「これは……………!?!」

俺の目の前に現れたのは四枚の盾。それが、俺達をビームから守ってくれている。だけど、一枚、二枚と盾は壊れていき、残り一枚になった。そしてその一枚もひび入ってきている。頼む。壊れるな。俺はまだ死にたくない。そして、最後の盾はボロボロになりながらも、敵の攻撃を防いでくれた。

「この戦い、俺の負けか」

もう戦う気力も残っていない。実質、俺の敗北だ。

「だけど、俺達の勝ちだ」

次の瞬間、敵が水で構成された槍に貫かれる。

「一夏くん、よく頑張ったね。後はおねーさんに任せなさい」

俺はあくまでただの囷だ。三分、敵を足止めが出来たら、それで構わないのだ。それにしても、眠い。後は楯無さんと先生に任せて、俺は寝るとしよう。起きた時には、全部終わっているのだから。

## 第十二話（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。

今回で単一仕様が明らかになりました。まあ、使い勝手はかなり悪い能力ですが、そこは頑張っ行ってきたいと思えます。

それと、今回一夏が主人公みたいでしたが、まあたまにはこんな感じで書いていくことになります。

感想は明後日までに返信させてもらいます。

感想や意見もお待ちしています。

これからもこの小説をよろしく願います。

## 第十二話（前書き）

これで一巻の内容が終了です。

## 第十三話

「ぐ……………！」

体全身が痛い。流石に無茶をし過ぎたようだ。最後の辺りは良く覚えていないが、保健室に居るみたいなので、死んではいけないのだから。

「気がついたか」

今の声は千冬姉さんか。  
出来れば、見舞いであって欲しい。この体で説教は色々つらいからな。

「体に致命的損害とまでは言わないが、全身の筋肉はボロボロだ。数日は地獄だろうが、まあ慣れる」

「筋肉痛に慣れるのは、勘弁したいんですけど……………」

筋肉痛に慣れる程、体をボロボロにするのは、余程の馬鹿かマゾくらしかいない。俺はそのどちらでも無い。

「まあ、いい。今回は大事が無かったが、次回も大丈夫とは限らん。私も家族に死なれるねは目覚めが悪いからか」

千冬姉さんの言葉が耳に痛い。うる覚えだが、俺達の前に現れた盾が無ければ、あの時確実に死んでいた。あんな主人公補正のような出来事は二度と起こらないだろうから、次に戦闘する機会が合ったら、もう少し考えないといけないな。

「私は後片付けがあるから仕事に戻る。今日は保健室で休んでおけ」

相変わらず、仕事に真面目だな。後片付けなんて一番面倒な作業を嫌な顔一つしないとは。俺だったら、文句の一つは言うのだけど。

「は、入るぞ」

今度は筭か。筭には何を言われるだろうか。

「なあ、一夏……………」

「どうした？」

何となくだが、嫌な予感がする。なんていうか、筭の目が今までと少し違う。

「口では弱いなどと言っていたが、お前は強かったぞ？クラスメイ  
トもお前のことを見直していた」

やってしまった。クラスの連中が居る前で戦ったらどうなるかを考  
えていなかった。これは非常にまずい。俺のISが欠陥機であるこ  
とは知らないから、生徒会長の特訓によって強くなった織斑一夏と  
いう印象が広まってしまふ。そんなことになったらどうなるかなん  
て、想像しなくても分かる。

「途中で危ない所があつたが、それを乗り越えたお前はまるで主人  
公のようだったぞ」

「いや、あんなのただのまぐれだから」

あんなまぐれで主人公扱いをされるのは非常に困る。有名無実とい  
う言葉が思い浮かぶよ。

「そんなに自分を謙遜するな。今日のお前は格好良かったぞ」

誤解が加速していく。学園に行きたくないぞ。行けば、比喩など無  
しで地獄が待っている。

「ではな」

勘違いしたまま箒が去っていく。おそらく箒のイメージしている織斑一夏は小さい頃の俺なんだろうな。箒だけで無く、千冬姉さんにもそういう節が見えるが、箒のイメージしている俺はもういない。俺は自分の才能に絶望して、努力を諦めた負け犬に過ぎない。

「嫌な事を思い出した。もう一回寝よう。嫌な事はさっさと忘れた  
い」

俺は押し寄せてくる眠気に身を委ね、そのまま眠りに落ちていく。

「僅かに誤差が生じたが、これで私の計画は達成された」

男はディスプレイを見ながら笑っている。

「お前は良くやってくれた。今の私は機嫌が良い。何か欲しいもの  
があれば言っと良い」

男は隣で腕を組んでいる少女に言う。その少女の身長はおおよそ167cm。フードを被っているため、顔は見えない。

「一つだけ欲しいものがある」

少女の答えに男は意外そうな顔をする。

「珍しいこともあるな。お前が何かを欲しがるとは。それで何が欲しいのだ？」

男がそう言うと同時に少女はISを展開する。

「お、お前、何をやっているんだ。何故、ISの展開を……………」

少女は男の言葉に何の反応もせず、何かを呟く。それと同時に少女の手に双剣が現れる。そして、少女は何の躊躇も無く、男に双剣を突き立てる。

「がっ……………!？」

「私が欲しいのは貴方の命。これでようやく仕事が終わったわ」

人を一人殺したというのに、少女は特に気に止めることも無く、その場から立ち去る。

「これで束から頼まれていた仕事は全部完遂出来た訳か。正直、束はあまり好きじゃないけど、彼を守るためだから我慢することにしましよう。」

そうしている内に少女は建物から抜け出していた。

「やるべきことはやったし、後は貴方次第よ、一夏」

そのまま少女は夜の闇に消えていった。

## 第十三話（後書き）

この小説を読んでいたいただきありがとうございます。

今回の話で一巻は終了。次回は楯無さんの回になると思います。今回のラストで正体が分かった人が居るかも知れませんが、正体に関しては出来る限り感想では書き込まないようにして下さい。

感想や意見もお待ちしています。

これからもこの小説をよろしくお願いします。

閑話（前書き）

今回は楯無さんの回です。

## 閑話

「家の掃除で疲れた」

IS学園に来てから、初めて家に帰ってみれば、家はほこりだらけであった。特に千冬姉さんの部屋はひどく、ゴミブリが群れをなしていたほどである。社会人なんだから、掃除ぐらいはきちんとしてもらいたいものだ。

「あれ？鍵が空いている？」

鍵は朝、ちゃんと閉めておいたはずなんだが……誰かが開けたのか？

仮に誰かが部屋の鍵を開けていたのなら、特殊な技能持ちで無い限り、鍵を開けれるのは先生だ。俺が基本的に交流を持っている先生は三人。まず、千冬姉さんは山田先生と一緒に何処かに行くと、昨日言っていたし、もう一人の先生は、銃火器の扱いと銃火器を持った状態での格闘術を教えてもらっているが、部屋に無断で入れるほど仲が言い訳ではない。先生を除いた状態で鍵を合法的に開けられる人物は俺の知り合いに一人だけ存在する。取り敢えず、部屋に入るとするか。

「お帰りなさい。ご飯にします？お風呂にします？それともわ・た・

し?」

「楯無さん、そんな格好だと風邪引きますよ?」

「反応うすいね」

「逆に楯無さんはその程度の色仕掛けが通用すると思っっているんですか?」

自分の国に取り込もうとして他の生徒に色仕掛けは何度かされてるからな。一ヶ月前の俺ならともかく、今の俺には通用しない。

「全く思ってないわ」

「だったらしないでくださいよ。それより楯無さんはご飯はもう食べましたか?」

「まだ食べてないけど………」

「それじゃ、ご飯食べていきます?」

「一夏くん、料理作れるんだ」

姉が姉なだけに、家事スキルが無いと、まともな生活が不可能だから、手に入れざるを得なかったんだけどね。

「それで和風ハンバーグを作ろうと思うんですが、楯無さんは大丈夫ですか？」

「うん、問題ないよ」

待たせるのもあれだから、さっさと作ることにしよう。

「はい、出来ました」

「これ、本当に一夏くんが作ったの？」

「他に誰が居るんですか……………」

まあ、気持ちは分からないこともないけど。

「まあ、それもそうね。それじゃ、いただきます」

「いただきます」

今日のは中々良い出来だな。失敗してたらどうしようかと思った。

「美味しいわね」

「ありがとうございます」

楯無さんの口に合って良かった。そうだ、楯無さんが居るんだから、聞いて置かないと。

「楯無さん、これを覚えるのにどのくらいかかりますか？」

「これは……………一夏くんも随分難しい事を覚えようと思ったわね」

「そんなに必要無いですよ。二つ使えばそれで良いので」

「二つねえ……………一夏くん、才能あまり無いから、二つでも臨海学校の頃になるわね」

今ほど凡才の身を恨んだことはない。俺のISを運用する上ではかなり重要なスキルになるのだが、こればかりは仕方ないか。

「努力はします」

「うん。努力をするのなら、幾らでも手伝ってあげるよ」

楯無さんには本当に頭が上がらないな。才能が無い俺にここまでしてくれるなんて。

「そういえば、一夏くんって趣味とかあるの？」

「あるにはありますよ。あまりうまくは無いですけど」  
「どんなの？」

「絵ですよ、絵」

まあ、そちらも才能がゼロに近いので普通の絵しか書けないのだけ  
ぞ。

「見せてもらっても良い？」

「構いませんが、そんなに凄いものではありませんよ？」

絵、どこにしまったけ？確かこの辺に………お、あった。

「はい、どうぞ」

「これ、暮桜に乗っている織斑先生？」

「はい」

「中々うまくじゃない」

楯無さんはこういうネガティブな発言を言つと怒るから口には出さ  
ないけど、ここまで絵がうまくなるのに三年掛かった上に、このレ

ベルに突入してからまるで上達の気配が感じられないからな。

「美味しい料理も食べさせてもらった上に絵も見せて貰ったから何かお礼をしないと」

「いや、そんなお礼なんて」

楯無さんにはISの修行を見て貰ったりして貰っている時点で感謝しているのに、これ以上何かして貰うのは厚かましいにも程がある。

「人の好意は受け取るべきよ」

「ですが……………」

「いいの、いいの。それより一夏くんはお昼は何を食べるの？」

「火曜日と木曜日以外は弁当ですけど」

「そう。じゃあ明日お弁当作ってきてあげるわ」

「え……………」

「それじゃあ、明日楽しみにしててね」

そのまま、部屋から出ていく楯無さん。楯無さんが弁当を作ってきてくれる？楯無さんが作ってくる料理は何となくやばい気がする。

いや、味の問題は無いだろっけど、俺のストレス的な意味でやばい。

「うん、もう何でも良いや」

明日は朝の修行があるんだ、早めに寝ないといけないな。決して現実逃避なんかではない！無いからな！

## 閑話（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。

今回は楯無さんの回です。何故、楯無さんかと言われれば、楯無さんは三巻の内容では殆ど出ないので今の内に出しておこうという考えです。ついでに幾つかフラグも建てています。

感想や意見もお待ちしています。

これからもこの小説をよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6384w/>

---

IS インフィニット・ストラトス 織斑一夏の憂鬱

2011年10月28日21時35分発行